勝手にしやがれ

ムジカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勝手にしやがれ

【Ｎコード】
Ｎ２４０４Ｆ

【作者名】
ムジカ

【あらすじ】
俺はなんてことをしてしまったんだろう。でも仕方なかったんだ。

なんてことをしたんだろう、俺は。

愛おしくて愛おしくて可愛くて可愛くてたまらない彼女を殴るなんて。

でも、気づいたら勝手に平手打ちが出てしまっていた後だった。

後悔役立たず。

だけど、でも――

眼下には、泣きじゃくりながら左頬を押さえて横たわる恋人の莉子。小さくて華奢な白い躰に、紫色のリボンがついた黒い化繊のストラップワンピースという薄着姿。きれいに眉が隠れる長さに切りそろえられた前髪に、胸元までの長さの艶やかな黒髪が紅潮した泣き顔をほとんど隠している。　罪悪感と後悔の念に押しつぶされて膝から崩れた。

莉子はずっと小声でごめんなさいと呟き続けている。

両手を伸ばして頬に触れようとすると、彼女はビクッと肩をすくませた。

「ごめんなさい……ごめんなさい。莉子を許して。ごめんなさい……」

莉子の顔が乱反射する。よく見えない。鼻の奥が痛くなる。

「健ちゃん、泣かないで、莉子悲しくなる」

「莉子……ごめん。ごめんね」

彼女の華奢な、薄い肩や細い腕を抱きしめると愛おしくて愛おし

くて抑えきれない暴力的衝動が躰の奥からこみ上げてくる。

俺だけのものにしたいのに。
一つになりたいのに。
でも、莉子があんなこと言うから———

焦燥が強迫する。
嫉妬が白熱する。
愛情が暴走する。
愛してるってなんだっけ？

二ヶ月前にクラブで女に刺されて一月ほど入院した。莉子とはその頃出会った。
莉子は情緒不安定からくる過呼吸と微熱を繰り返して入院していたらしい。
彼女の微熱の続く華奢な躰を抱きしめる。
「莉子、ごめんね？」　左頬を腫らした莉子に口づけながら、馬乗りになる。
鼻先をくっつけ、涙を舐めとる。
莉子は頷きながら、俺の首に腕を巻きつけた。「莉子ね、健ちゃんのこと好きよ？　大好きなの……」
「俺も莉子が好きだよ。大好きだよ……」
一番やわらかくした唇を押しつけ合いながら床を転げまわる。
莉子を上にし上体を起こさせて、ストラップをずり下げ、小ぶりな莉子の胸の尖った部分を親指の腹でこする。
「ふにゅうっ……」
莉子は肩をびくびくさせて苦しげに目を閉じた。
「莉子、可愛い」

片手で背中から臀部を撫で回し、もう一方は引き続き乳首を弄った。
「ん……ふぅ、あっ、け、健ちゃん……じんじんするよぅ……」
「痛い？」
「痛くないもん……」
俺も起き上がり、さらに莉子に口づける。
咥内に舌を潜り込ませ小さな舌を絡めとる。
「健ちゃん……」
莉子は熱い呼吸を繰り返しながら、ゆっくり両足を開いて見せた。

五年前、真冬にゴミ箱でのたれ死にかけていた俺を拾った神野加護というふざけた名前の野郎は、どういうワケか翌日もわざわざ様子を看にきてくれた。
奴は病院のベッドにかけられた俺のネームプレート【小島健一】を【小鳥健一】と読み間違えて、
「俺、カミノカゴって名前なんだけど、アンタ小鳥って言うんだ。小鳥とカゴか。面白いね」とのたまった。
俺はその素敵な目の悪さと、メルヘンチックでアホな思考回路と名前が気に入って、加護に言った。
「俺と親友を前提に付き合って下さい」
「アンタ馬鹿でしょう」
と即答したくせに、加護は今でも俺のベストフレンド野郎だ。

あの病院のネームプレートがなければ、加護の勘違いは生まれず、俺はあいつの事をただのすかした無表情野郎として気に喰わなかったはずだ。
あいつの働いているバーは変人のたまり場でイカしたロックが大音量で流れていて、オーナーは時々ラリってご来店しては客と飲んだくれて帰る。

加護は全身タトゥーやピアス人間の意味不明な話を聞くともなく聞き流し、淡々とシェイカーを振ったり、マドラーでかき混ぜたりしてカクテルを作り、ビールを注ぐ。
俺は無表情で働く加護を見るのが好きだ。
一番まともな振りをしているあいつこそ、一番イカレてる。
加護はクールだ。そしてアホだ。
絶対、ムッツリスケベのド変態野郎に決まっている。
じゃなけりゃ俺と一緒にいられる訳がない。

地下の扉を開くと、コンクリート打ちっぱなしの壁とフラッグチェックの床に赤いカウンターが目に飛び込んできた。
「いらっしゃ……」
加護の声が途中で消えた。
「悪かったな。待ちわびてた訪問者が客じゃなくて俺で」
ストゥールに跨るように腰を降ろしてカウンターに両肘を立てる。
加護を黒目の部分だけで見上げてみる。
黒髪をオールバックに流して、黒い薄手のカシミアのセーターを上等そうな丸首シャツの上に着ている。
「ちっ、気取りやがって」
「素肌にセーター着てる奴よりは控えめだろ」
加護は微かに口角をあげ、サーバーからジョッキにギネスを注いで俺の前に置いた。
「七百円」
「生卵入れてッ！」
加護はキレイな手つきで、しかも片手で、卵を割入れる。ケツポケットから千円を出すと、きっちり三百円を返した。
「どうした？　浮かない面して。なんかあった？」
ハイネケンの瓶を片手に中から出てきて俺の隣に座る。
「え？」

「閉店間際にくるなんて、何か話したいことあるんだろう」
「二人っきりになりたかったのぉ～」
「帰れ。サノバビッチ」
「加護クン冷たぁい」
「お疲れ」
加護は俺のジョッキに瓶を軽くぶつけて一口飲む。加護セレクトのＢＧＭはクリフォード・ブラウン。どこまでもすかした野郎だと思う。
「加護、ＪＵＤＥかけてよ。ぶっ飛ぶ感じに」
「佐久が持ってったままだよ」
「多分アイツ借りパクするぜ」
「また買うよ」
と肩をすくめる加護。俺は人差し指で卵をかき混ぜて一気にあおった。
「気持ち悪ぃ飲み方すんなぁ、お前」
「元気ださなきゃ莉子とラビュンな毎日のために」
「あぁ。クリコと続いてんだ」
「うん」
「女に刺された後でよくやるな」
加護は俺の女に手ぇ出しやがってとか言わない。
結果的に俺が莉子を横取りしたわけだが、莉子と寝た後、加護に報告したら、眉一つ動かさずにしれっと一言『ふぅん』と言った。
その後も相変わらず俺たちは一緒に遊ぶ。
俺の部屋に呼んだときだけ、クリコが気まずいだろうと言って来なかったくらいだ。
「オニャノコ大好きー」
常套句を口にする。
「セックス大好きー、だろ？　中学生かっつの」
すかさず加護が続けた。
「加護は？」

「セックス？」
「うん」
「嫌いじゃないけど、面倒くさい」
「信じらんない！」
頬を両手ではさみ、思い切りベロを出して白目を剥くと、加護は珍しく声を上げて笑いながら俺を指さした。
「汚ぇ顔」
「うるせぇよ淡白質」
「仕方ねぇだろ。性分なんだからよ。つうか小鳥なら雑穀食ってろ」
「小島だよ。小島麻由美とお揃いの。無関係者だけど」
「俺のなかでは小鳥は小鳥なんだよ。いいじゃねぇか。島も鳥も見た目あんま変わんねぇし」
「ちょんちょんと山じゃ大きな違いだぜ」
俺はギネスを飲みほしてジョッキをテーブルに思い切り置いた。
加護の中には執着心みたいなものが存在しないっていうのか。

「……小鳥？」
「加護、俺たち親友？」
鳩が豆鉄砲喰らった顔して加護が俺を見ている。へへっバァカ。
「なぁ、加護。俺がいなくなったら、お前悲しむか？」
「何言ってんだよ。平気で二、三週間音信不通になる奴が」
「そんなときお前どういう気持ち？」
「どうって……」
「寂しいとか、残念とか、心配とか！」
「ねえよ」
加護は眉をひそめて言い捨てる。空気が氷の刃に斬り裂かれた気がした。
とりあえず何を差し置いても『する』って言って欲しかった。
加護は俺の親友で、離れていても俺と供にあるべき存在だからだ。
「小鳥が鳩豆な顔してんじゃねぇよ。ひねりがねぇな」

苦笑を一つ、ハイネケンをあおる。
「小鳥らしいから、心配もしないし気にもしない。それに、お前はお前でしかいられないだろ」
「どういう意味だよ」
「人のことなんか気にしない。ありのままの自分でしかいられない。いつもむき出しで、めちゃくちゃ。だけど、それって純粋だ」
「それは褒めてんの？」
「褒めてねえよ。どうしようもねえって言ってんだよ。お前だって俺を心配させたくて音信不通になってるわけじゃねえんだろ」
「うん。そうだけど、意味わかんねぇ。褒めてねぇの？」
「なんでお前褒めなきゃなんねぇんだよ」
「じゃあ何なんだよ」
「認めてんだよ」
加護の頬がサッと赤くなった。
光が射して見えるほど、ハッとする俺の視界。
「親友として？」
「知らねえよ。馬鹿じゃないの？」
加護は顔をそらして吐き捨てる。
「認めてんだろ。素直になれよ」
無理やり加護の肩を抱きくるめると
「うるせぇサノバビッチ」と言って手を払った。

「だって加護、友しあってるだろ、俺たち」
「いいからクリコとヤッてろよ」
「したもん」
「あっそう！」
「今日さ、聞いて聞いて。クリコにさ、俺と加護どっちが良かったか聞いたらね」
「聞くなよ。やっぱ馬鹿だろお前」
「いいの。聞いてって。でさ、俺の方がいいって加護はそつがなさ

すぎてつまんないって言ったからさ、思わず手が出ちゃって」
「は……っ？」
加護が間抜けな顔で俺をガン見した。
「なんだよ？」
「なんだよじゃねぇよ。何で手ぇあげてんだよ」
加護は意味が分からないという風に唖然と俺を見ている。
「だって加護のこと馬鹿にしてるだろ」
「ていうか、普通彼氏より他の男が良かったなんて言わねえだろ。単純にお前の方が相性良いとか、なんかそんな理由で……」
「加護は俺の唯一の親友だぜ？　馬鹿にするのは俺だけでいいんだよ」
「よくねぇよ。ちゃっかり馬鹿にすんな」
「でも、泣いてる莉子を見た瞬間に俺も悲しくなったんだ。愛しい人を泣かせるなんて絶望的だった」
加護は眉間に皺を寄せて俺を凝視している。
「なんだよ？」
「小鳥の思考回路について考えてる」
「加護は頭悪いな」
「お前よりは良い」
「なら、単純なことだろ？　大事な親友を馬鹿にされて許せない。だけど大事な恋人を泣かせるのは絶望的だってハナシだよ」
加護はまだしかめっ面で俺をみている。
「だからさ、加護。人間だって動物だろ？　群れなきゃ生きていけねぇし、つがいにならなきゃやってけねぇんだよ。一人で生きていけるとかいうほうが変なんだよ」
「お前が群れてたことあったか」
「群てんじゃん。加護と。つぅか、オメェには執着心とかねぇのかよ」
「いきなりなんだそれ」
「莉子の時もさ、しれっとしてさ。お前にはパッションっつうよう

なモノはないのか？」
「パッションて。サノバビッチ、」
「こう、なんつーか、俺が！　俺の！　俺は！！　みたいなさ」
「うーん……。他人の気持ちは縛れねえと思ってる。ただ、わかったのは俺がいねえと小鳥は駄目なんだろうなってのと、俺がいねえとこの店はやってけねぇんだなっつう事」
「そう！　だからさオメェも俺がいないと駄目って気持ちをもっと出せ！」
「馬鹿じゃねぇの」
「なんだと！？」
「それを読みとるのがお前の義務だろ」
「無理だよ！　エスパーじゃねぇし、お前分かんねえもん！」
「とりあえず、友してんのはお前だけだよ。クソ・サノバビッチ」
「加護の馬鹿」
「こうやってさ、罵倒し合えるのも友情の特権だよな」
「俺、加護とだったらベロちゅう出来る！　ハイってたらヤったっていい！」
「気持ち悪ぃから帰れ。んで、彼女にいつもより少し余分に優しくしてやれ」
加護はハイネケンを掲げると、俺の頭に中身をぶちまけた。
「何しやがる……この野郎ッ」
俺が掴みかかっても加護は平然として言う。
「クリコが目を覚ます前に帰ってやれよ」
「加護の馬鹿ッ！」
「神のご加護はいつも友にある、ってな」
加護はひらひらと俺の目の前で手を振った。
「馬鹿じゃないの！？」
「お前がな」
「加護がムカつく事しか言わないから小鳥は帰ることにした」
「帰れ帰れ」

「小鳥が飛んでいった！　加護のハピネスが一億減った！　加護の素早さが十減った！　加護の男らしさが百万減った！　加護は寂しさに倒れた！　ぴろりろりぃ～、ばーか！」
「うんうん。はいはい、じゃあな馬鹿」
言いながら加護は俺を出入り口まで押しやった。
「冷たくするけど俺が死んだら加護は泣くんだろ？」
「お前が喜びそうだから泣いてやんねぇよ」
「泣けよ！」
「いいから帰れ馬鹿」

帰り道、玉川上水に飛び込んでやろうかと思った。満月が綺麗だったから、あれを見上げながらどぶ川で意識が薄れるのも乙だと思ったが水がないのでやめた。
それに神野加護はいつも友、つまり俺にあるわけだから満足だ。
俺の大好きな女の子とセックスは金で買えるけど、友情は買えない。
そういや、愛ってなんだっけ？
満月を見上げながら、莉子のことがどうでもよくなった。

また二、三週間どっかに行っちまおうかな。
今度は沖縄にでも行っちまおう。
金なら俺を刺した女が充分振り込んでる。
加護にはちんすこうをくれてやろう。

きびすを返し、駅前のネットカフェに向かう。
朝十時になったら片道航空券を買って沖縄だ。
宮古島のカッツくんの家に転がり込んで、オリオンビールで毎晩ロカビリーナイトだ。

しばらくサヨナラ東京。
しばらくサヨナラ加護。

まったり〜な
ほっこり〜な

気持ちよく歌っていると、前方から真っ黒なセダン車が近づいてきた。スピードを上げてあっという間に俺の目の前だ。
ハイビームが目を刺した。
強い衝撃の後、俺は宙にぶっ飛んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2404f/

勝手にしやがれ

2010年10月8日15時22分発行